ビートルズの曲にみる”マネー”

中湖 康太

ビートルズがすごいのは、やはり、音楽、娯楽といっても、生活に欠かせないお金 “マネー” を直視し、それをダイレクトに扱った曲があるということです。「ビートルズが一筋縄ではいかないことをよく物語っている。」と、ザ・ビートルズ・クラブ編集室の葉山真氏が、アルバム「ウィズ・ザ・ビートルズ(“With The Beatles”）」にある「マネー (“Money (That’s What I Want)”) 」という曲の解説で述べています。ここでは、3つの曲について触れたいと思います。

アルバム「ウィズ・ザ・ビートルズ」のラスト・ソング「マネー/ (それが俺が欲しいものだ)」～ お前の愛で俺の請求書の支払いはできない

まず、第一に、先に述べた、ビートルズのセカンドアルバムである「ウィズ・ザ・ビートルズ(“With The Beatles”）」にある「マネー/(それが俺が欲しいものだ)(“Money (That’s What I Want)”) 」という曲です。「ウィズ・ザ・ビートルズ」は、1963年11月にイギリスで発売されました。「マネー」はビートルズのオリジナルではなく、1959年にバレット・ストロングがリリースした曲のカバー（他のアーティストの曲を演奏・歌唱したもの）ですが、ジョン・レノンのヴォーカルが破壊的です。歌詞の一部を抜粋します（訳は筆者）。

人生で最高のものはただである
しかしそれらは鳥や蜂のためにとっておいてやれ

さあ、金をくれ
それが俺が欲しいものだ

おまえの愛は俺にスリルを与えてくれる
だが、おまえの愛は俺の請求書を支払ってはくれない

金ですべてを手にすることができないのは確かだ
でも、金で買えないものは俺は使えないんだ

The best things in life are free

But you can keep them for the birds and bees

Now give me money

That's what I want, that's what I want

Yeah that's what I want

Your lovin' give me a thrill

But your lovin' don't pay my bills

Money don't get everything it's true

What it don't get I can't use

...

(出典:「ウィズ・ザ・ビートルズ」EMI ミュージック・ジャパン)

葉山真氏は、同アルバムの解説の中で、「アイドルとしてはタブーとも言える強烈な歌詞を歌うジョンのパワーはまさに破壊的。ビートルズが一筋縄ではいかないことをよく物語っている」と述べています。タブーであっても、現実を直視する、歌う、それがビートルズのすごさなのです。当たり前の話ですが、ビートルズといえども、ブレイクするまで、ハンブルグでクラブ演奏をするなど下積みを経験しています。好きな音楽をすること、生計を立てること、それは2つであって1つである、ビートルズは下積み時代にそれを思い知らされたのでしょう。

アルバム「ハード・デイズ・ナイト」の「キャント・バイ・ミー・ラブ」

～ お金で愛は買えない？

次に触れたいのが、ビートルズのサード・アルバムで、1964年7月にビートルズの映画デビュー作の劇場公開と同時にリリースされた「ハード・デイズ・ナイト("A Hard Day's Night")」の中にある「キャント・バイ・ミー・ラブ("Can't Buy Me Love")」です。この曲は、ポール・マッカートニーが作曲し、リード・ボーカルをつとめています。

言葉通り訳せば、「愛はお金では買えない」("Can't Buy Me Love")ですが、歌詞をよく読むと、「そうであって欲しい」という願望を歌ったものです。「現実はそのとはいかないけど・・・」と但し書きがつくのです。ポイントを訳すと以下のようになるでしょう(訳は筆者)。

君が満足するなら、僕は君にダイヤモンドをプレゼントするよ

君が満足するなら、何でも買ってあげるよ
何故なら、僕はお金のことはあまり気にしてないから
お金で愛は買えないから

僕は君に持っているものは全部あげるよ
もし君が僕を愛していると言ってくれるなら
僕はあげれるものはあまり持っていないけど
でも持っているものは君にあげるよ
何故なら、僕はお金のことはあまり気にしてないから
お金で愛は買えないから

ダイヤモンドの指輪はいらないと伝えてくれ
そうすれば僕はうれしいよ
お金で買えないものを欲しいと伝えてくれ
何故なら僕はお金のことはあまり気にしてないから

I'll buy you diamond ring my friend
If it makes you feel alright
I'll get you anything my friend if it makes you feel alright
'Cause I don't care for much for money
Money can buy me love

I'll give you all I've got to give
If you say you love me too
I may not have a lot to give
But what I've got I'll give to you
I don't care too much for money
Money can't buy me love

Say you don't need no diamond rings
And I'll be satisfied
Tell me that you want the kind of things
That money just can't buy
I don't care too much for money
Money can't buy me love

(出典:「ハード・デイズ・ナイト」EMI ミュージック・ジャパン)

最後の部分が、この曲のミソです。「自分は何でも買ってあげるよ、自分はお金のことはあまり気にしてないから、お金で愛は買えないから」と前半で詩っているのですが、最後に、「ダイヤモンドの指輪はいらなくていいと伝えてくれ、・・・お金で買えないものを欲しいと伝えてくれ」と言っているのです。

「お金で愛は買えない」、それは理想であり、真実の一面です。でもそれは真実のすべてではない。ポールの叫び、うたえるようなボーカルは、理想と現実のギャップを埋めようとするかのようです。

アルバム「パスト・マスターズ」の「ジョンとヨーコのバラード」

～ お金はあの世にもっていけない

第三に触れたいのが、アルバム「パスト・マスターズ」に入っている「ジョンとヨーコのバラード」という曲です。この曲は、1969年5月にリリースされた20枚目のシングルだそうです。ビートルズの解散が、1970年4月ですから、その約1年前ということになります。作曲もリード・ボーカルもジョン・レノンです。バラードとついていますが、実際はアップテンポな曲です。オノ・ヨーコとのハネムーン旅行についてのものですが、ハネムーン中にも、メディアに追いかけられ、のんびりできない様子が歌われています。

2人でイギリス南部の港街サザンプトンからオランダ、フランスへ飛ぶ。パリからアムステルダムにドライブ、そして、スペイン近くのジブラルタルで結婚する、アムステルダムのホテルで1週間泊る。新聞は、2人がベッドで過ごしていることを報じる。二人だけの平和な生活をしたいだけだと答える。ベニスに行く。新聞は、ジョン・レノンはオノ・ヨーコにイカレてしまったと書き、2人は、ヤクをやっている導師のようだと報じる。いそいそと飛行機でロンドンに帰る。

アムステルダムのホテルでのオノ・ヨーコとの会話が出てきます。(訳は筆者)

何かのときのために、お金をためる

すべての服を慈善団体に寄付する

すると、昨日の夜、妻(=ヨーコ)が言う

「あなた何をやっているの、

死んだら魂以外のものは、あの世にもってけないのよ」と

これは考えなきゃならない

Saving up your money for a rainy day

Giving all your clothes to charity

Last night the wife said

O boy, when you're dead

You don't take nothing with you

But your soul – think

(出典：「パスト・マスターズ」EMI ミュージック・ジャパン)

この時のジョン・レノンは、ビートルズで大成功をおさめ、大金持ちになっていました。それでも、何かのときのためにお金をためよう、ためていこうと考えていた、それは、人間として極めて当り前のことでしょう。でも、お金をもうけること、貯めることが人生の目的だったとしたら、それは違うのではないか。オノ・ヨーコの言葉で、ジョン・レノンがふと考えさせられたのではないか、と思います。

お金は何のためにあるのか？生きるためにお金は不可欠なものです。お金がなければ幸せにはなれないでしょう。しかし、お金をもうけることが目的だとしたらそれは違うでしょう。どんなに大金持ちになって成功しても、あの世にはお金は持ってはいけない。勿論、自分の子供や孫にお金を残したい、子々孫々のためということもあるかもしれませんが。でも必要以上の富は、子孫をスポイルすることがあるかもしれません。歴史をみればどんな繁栄も、永遠なものではない、と感ぜざるを得ません。贅沢や放蕩などで家が衰退してしまうことは多々あることです。

人生は自分で切り開くもの、自立する力をつけること、そして社会に貢献、役立てる人間になることが、人間にとって最も大事なことはないか、そのように思います。

経済学に「収穫逡減の法則(the law of diminishing returns)」、「限界効用逡減の法則(the law of diminishing marginal utility)」があります。お金に当てはめれば、一単位のお金から得られる効用(満足度)は、ある点までは増加するが、ある点までいくと、その後は減少していく、逡減していくのです。お金、富も、自分のためだけであれば、限界効用逡減の法則があてはまります、「お金はあの世にはもっていけない」のですから。

でも、世のため、人のためにするのであれば、限界効用は減少しないでしょう。むしろ増加するのではないのでしょうか。このような現象を経済学では「収穫逡増の法則(the law of

increasing returns)」と言います。つまり、富は増えれば増えるほど、その満足度が高まるのです。自分のためだけであつたらそうはいかないでしょう。

ジョン・レノンは、ビートルズ解散後に、世界平和を願い、「平和をわれらに」"Give Peace A Chance"、「パワー・トゥ・ザ・ピープル（人々に力を）"Power To The People"といった曲を作っています。

ビートルズは、1962年にデビューし、1970年に解散したわけですが、その音楽は今も新鮮で、刺激的です。ビートルズとしての活動はわずか7年ほどでありながら、その間に初期の鮮烈なロックから、中期のバラード、後期のサイケデリックミュージックと、その音楽は、ひとつところに留まることなく、変化して多様です（私は音楽には素人なので言葉や定義に誤りがあるかもしれませんが）。大衆性と芸術性を共にかねそなえた、すばらしい音楽であり、まさに「ビートルズ革命」と呼ぶにふさわしい、衝撃、影響を、ロック、ポップという枠にとどまらず、広く音楽界に、そして、社会におよぼしたとあってよいでしょう。個人的には、初期のビートルズが好きです。それは、ジョン・レノンのロックを基調として、ライブで活動していた時代のビートルズです。

ビートルズの個々の音楽の新鮮さ、素晴らしさ、全体としての多様性は、シェイクスピア劇にも例えられるのではないかと思います。悲劇、喜劇、史劇、特殊劇、そこでロマン、リアル、シュールな世界が展開されるのです。「シェイクスピアは、ドラマのジャンル、パターンの全てを網羅している」と、専門家から聞いたことがあります。シェイクスピアは古典として残り、現在も、演劇、映画、ドラマ等、様々な形でリメイクされています。ビートルズも現代の古典として生きつづけるでしょう。

(2014.12)